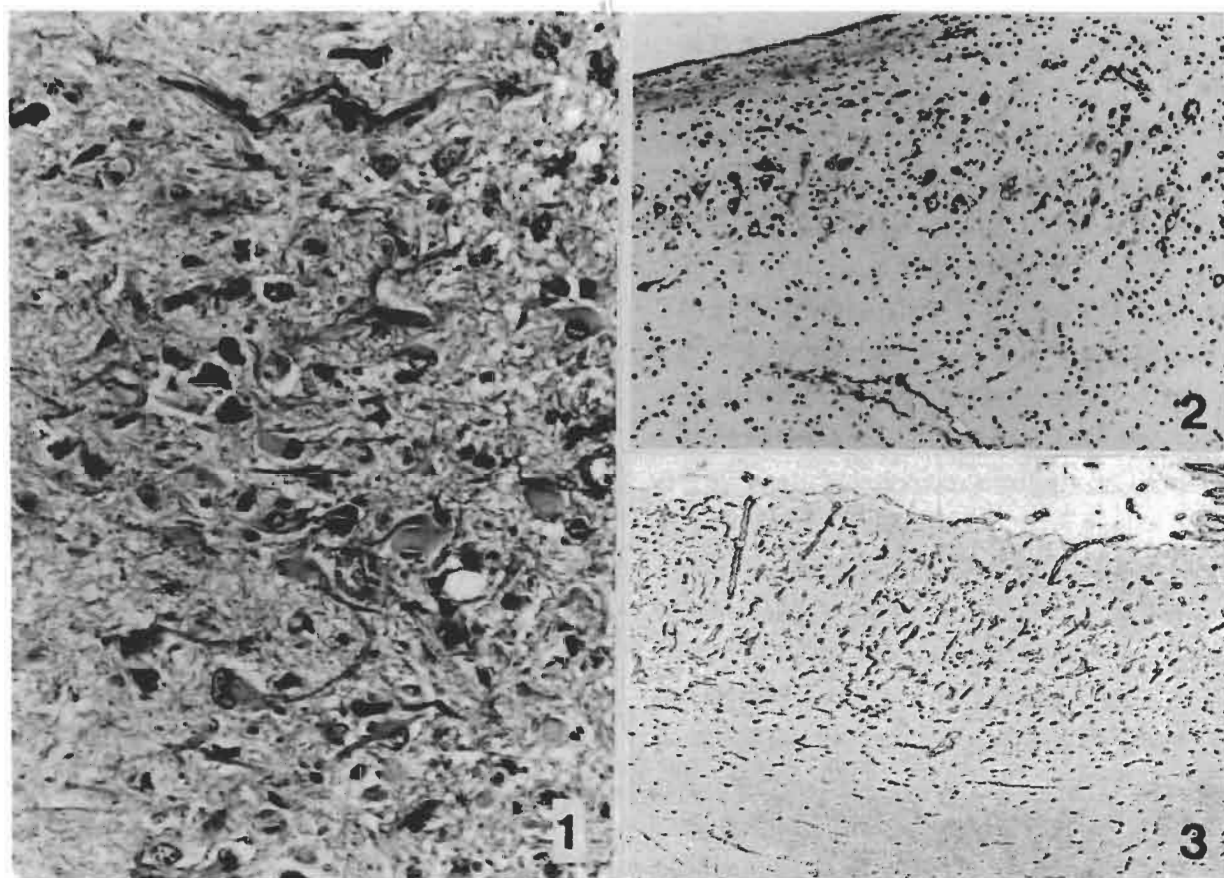


# 犬の 大 脳

北海道大学獣医学部比較病理学教室出題 第30回獣医病理学研修会標本No.539



動物：犬，シェルティー，雄，5歳。

臨床：本犬は2歳頃から3ないし10日に1度の割合で、数秒ないし1分間の間代性痙攣を示し、臨床的にテンカンと診断され、投薬により治療されてきた。抗痙攣薬(プリミドン)投与で痙攣発作の頻度は減じ、一時快方に向かったが、4歳頃から発作頻度の増加及び発作時間の延長が生じ発禁を伴うようになった。発作は数日間連続してあるいは数回の間欠的発作が起こることもあり、間に1ないし2時間の重積状態が認められた。このため、治療を他の抗痙攣薬(バルプロートナトリウム)投与に切り換えたが、症状は改善されず5歳の時点で安楽死された。なお、本犬の家族歴は不明であった。

肉眼所見：両側大脳半球の帯状回全域及び海馬腹端は矮小化し、両側側脳室は軽度に拡張していた。(検索は脳のみ実施)。

組織学的所見：帯状回皮質は神経細胞の減数のため正常の約1/2に減幅し、増殖した肥満型及び線維性星状グリア、ならびに小血管で置換されていた。神経網は粗鬆

化し、小血管壁や遺残した神経細胞に絡みつくように強好酸性の星状グリア突起が形成され(写真1, HE,  $\times 320$ )、増生血管壁は線維性に肥厚していた(写真3, 渡辺渡銀法,  $\times 80$ )。海馬腹端で、全域にわたり錐体細胞層が1ないし2層となり、特にSommer扇形部の加領域で神経細胞の減数・脱落およびグリア核の増加が著明であった(写真2, Nissl,  $\times 40$ )。残存する神経細胞は概ね健常であった。その他、帯状回皮質下白質及び海馬系の線維性グリオシス、ならびに卵形中心の軽度の髄鞘変性と肥満型グリア増殖が認められた。

上記と同質の灰白質の変化は、帯状回全域、海馬背・腹端、扁桃核及び視床背内側部に概ね両側・対称性に存在していた。小脳及び下部脳幹に著変はなかった。

診断：これらの病変のうち、その特異的な分布が重視され、〔大脳辺縁系における神経細胞の減数とグリオシス〕と診断された。また、本病変はヒトの特発性テンカンの病変と類似することなどから、疾患名は〔イヌの慢性特発性テンカン〕とされた。